

特別支援教育を担う教師の トレーニングプログラム開発に関する研究

研究課題番号 15330203

平成15年度～平成18年度科学研究費補助金（基盤研究(B)(2)）

研究成果報告書

平成19年 3月

研究代表者 進 一鷹

(熊本大学教育学部教授)

目次

研究の概要	1
1. 研究の目的	
2. 研究組織	
3. 研究経費	
4. 研究発表	
第Ⅰ部 知識の習得を中心としたプログラム（概説）	7
第1章 特別支援教育の動向と支援の可能性	9
第2章 特別支援教育の精神医学的基礎	15
第3章 行動上の問題への行動分析的アプローチに向けて	21
第4章 広汎性発達障害者に対する心理的援助	29
第5章 文字と数の基礎学習	35
第Ⅱ部 経験を中心としたトレーニングプログラムの提案（手続きと方法）	41
第6章 行動コンサルテーションの内容と指導方法に関する研究	43
第7章 問題解決モデルに基づく実習	55
第8章 心理劇による実習	63
第Ⅲ部 プログラムの総括的評価	71
第9章 プログラムの総括的評価	73
第Ⅴ部 資料	83

研究の概要

進 一鷹・干川 隆
(熊本大学教育学部)

I. 研究の目的

本研究の目的は、これからの特別支援教育を担う教師のトレーニング・プログラムを開発することにある。特別支援教育は、これまでの特殊教育の対象であった盲・聾・養護学校及び特殊学級・通級指導教室の幼児児童生徒に加えて、学習障害児や注意欠陥／多動性障害児等、通常の学級に在籍する特別な教育的支援を必要とする児童生徒への対応も積極的に行うものである。「今後の特別支援教育の在り方について（最終報告）」に示されているように、今後、特別支援教育において個々の幼児児童生徒の実態に合わせた指導の充実が必要である。このように、国の施策レベルでは特別支援教育への移行が行われているが、教師トレーニングのレベルでは、特別支援教育に携わる教師に必要なトレーニング・プログラムは何かについて十分な実証的検討は行われていない。

これまでの特殊教育では、障害の重複・重度化に対してどのように障害を軽減克服するかといった治療教育パラダイムに基づくトレーニングが中心であった。特別支援教育では、これまでの特殊教育で培ったノウハウに加えて、通常の学級で担任にコンサルテーションを行うコーディネーター的な役割が求められるであろう。では、どのようなトレーニング・プログラムを実施したら、コーディネーターの機能も含めた特別支援教育教師を養成することができるのであろうか。

本研究で得られた知見は、これからの特別支援教育を担う教師のトレーニング・プログラムとしてすぐに役に立つという結果と意義をもつであろう。

II. 研究経過

1. 特別支援教育を担うための教師に必要なトレーニング・プログラムの検討

1) プログラムの提案（平成15年度）

研究分担者は、KJ法を用いて各人が感じている特別支援教育の教師に必要な項目を出し合った（図1を参照）。その結果、特別支援教育を担う教員を養成するために必要なプログラムとして、「これまでの特殊教育が培ってきたノウハウ」と、「特別支援教育として教師に求められるノウハウ」の二つの領域から成ることが考えられた。さらにその内容を検討すると、①支援の個別化の項目（診断基準や心理・教育的アセスメント、支援の技法など）と、②支援のネットワーク化の項目（連携の仕方と必要性、教師のコミュニケーション・スキル、学級での支援など）に集約することができた。支援の個別化の内容は、これまでの特殊教育で培ってきたノウハウに基づくものである。一方、支援のネットワーク化の内容は、今日の特別支援教育の流れを反映したコーディネーター養成につながる項目であった。

2) プログラムの実施と検討（平成16年度）

プログラムの一部をA市の特別支援教育研修会（コーディネーター講座）と大学の地域貢献事業で

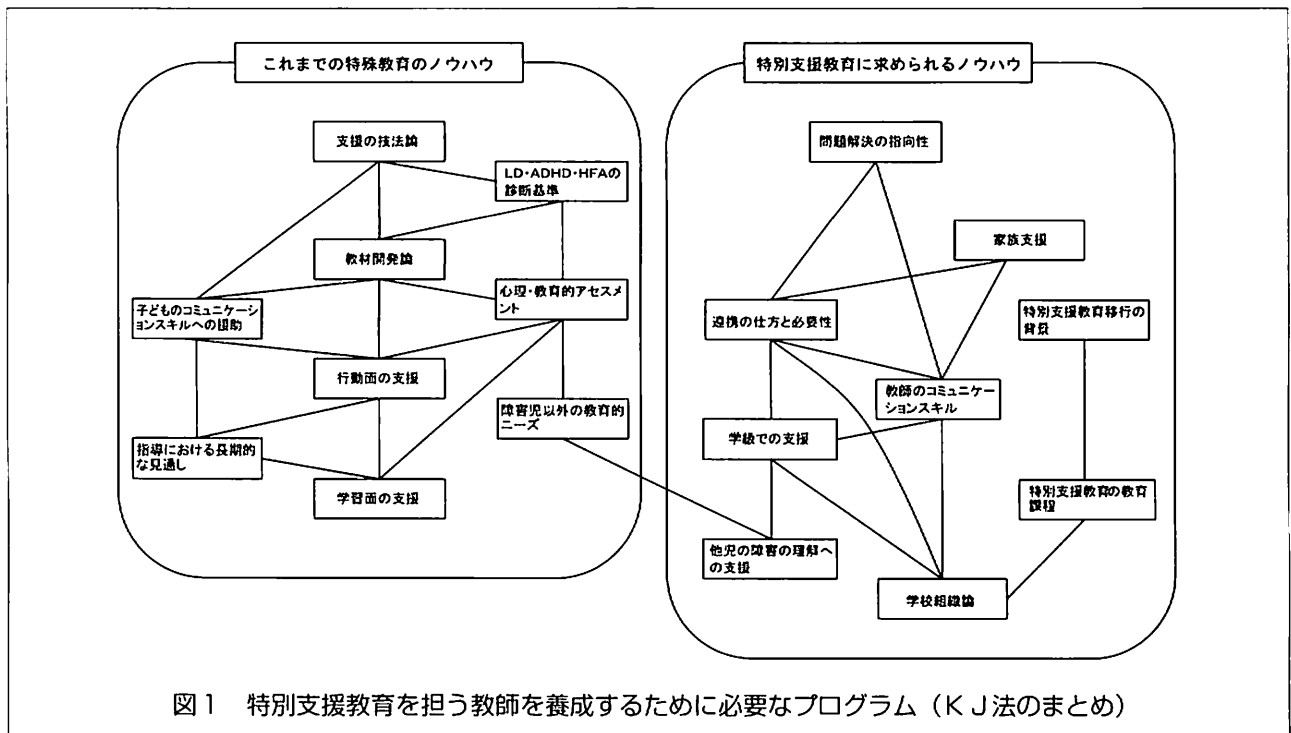


図1 特別支援教育を担う教師を養成するために必要なプログラム（KJ法のまとめ）

実施した。内容は、これまでの特別支援教育への移行や軽度発達障害に関する知識を中心としたものに加えて、学校での支援体制を作るためのスキルを養成するために、事例協議や問題解決スキルを習得するためのグループワーク、心理劇などの演習型の研修を取り入れた。参加者による評価は、学校での実践につなげる上で役に立つなど肯定的なものであった。

3) 精選されたプログラムの実施とその評価（平成17、18年度）

トレーニング・プログラムは、大学の公開講座を通じて平成17年度には40名の教員に対して、平成18年度には35名の教員に対して、それぞれ6回にわたって実施された。プログラムは、①知識中心プログラム（学びの基礎論、特別支援教育のける家族支援、特別支援教育の最新動向）と、②スキル中心プログラム（行動コンサルテーション、問題解決方法論、心を開くワークショップ）から成っていた。受講者による評価から、特別支援教育を実践する上で、知識とスキルの二つの習得という観点からプログラムを実施することが有効であることが明らかとなった。

2. 特別支援教育に対する意識と研修に関する調査研究

1) 特別支援教育の意識と研修に関する実態把握

平成15年には、A市の小学校81校の通常の学級担任教師486人、特殊学級及び通級指導教室担当者136人に特別支援教育の取り組みに関するアンケートを実施した（回収率89～92%）。その結果、通常の学級担任と特殊学級等の担任間で、文部科学省から出された報告書の理解に差があること、学習障害等の障害については理解しているが指導法の研修が必要なこと、さらに校内支援体制の構築の必要性も示された。

平成17年には、小中学校における特別支援教育の取り組みの実態を把握するために、A市の小学校81校（学級担任425人、特殊学級担任121人、特別支援教育コーディネーター81人）を対象にアンケート調査を実施した。平成15年の調査と比較して、すべての調査項目で知識・理解面の向上が見られた。課題として「保護者との共通理解」、「教職員の共通理解」、「支援体制づくり」の項目が増加していた。

さらにA市の中学校38校（学級担任169人、特殊教育等担当教師34人、コーディネーター 32人）を対象としたアンケート調査の結果から、中学校では小学校に比べて情報提供の場の必要性、特別支援教育についての知識・技術を向上させること、教員間の共通理解の必要性が明らかとなった。

3. 学習障害等の児童のニーズに応じた支援方法の検討

これまでの調査研究から、学習障害等の障害の理解は増えているものの、具体的にどのように指導したらよいのかといったニーズが明らかとなった。このことは、研究分担者が学校を訪問し、学校での教師との面接調査からも裏づけられた。そこで、平成17年度より、指導の難しい学習障害等の児童生徒への具体的な支援方法の検討として、学習につまずきのある児童に有効な支援方法の検討を行い、中間報告書を作成した。

Ⅲ. 本報告書の構成

本報告書は、これまでの研究で得られた知見をより生かすために、1) 知識の習得を中心としたプログラム（第Ⅰ部）、2) 経験を中心としたトレーニング・プログラムの提案（第Ⅱ部）、を要約し紹介するとともに、これらのプログラムを実施したときの3) 総括的なプログラムの評価（第Ⅲ部）、から成る。さらに資料として、上記の3の学習障害等の児童のニーズに応じた支援方法の検討についてまとめた中間報告書「学習につまずきのある児童への支援ガイドブック」を掲載した（第Ⅳ部）。

Ⅳ. 研究組織

研究代表者：進 一鷹 熊本大学教育学部教授
研究分担者：緒方 明 熊本大学教育学部教授
干川 隆 熊本大学教育学部助教授
肥後祥治 熊本大学教育学部助教授
高原朗子 熊本大学教育学部附属実践総合センター助教授
古田弘子 熊本大学教育学部助教授（平成15～16年度）

Ⅴ. 研究経費

交付決定額（配分額）

（金額単位：千円）

	直接経費	間接経費	合計
平成15年度	3,600	0	3,600
平成16年度	2,800	0	2,800
平成17年度	2,700	0	2,700
平成18年度	2,900	0	2,900
総計	12,000	0	12,000

VI. 研究発表

<論文等>

- 緒方 明・一門恵子・河田将一・上中博美・天野浩一郎（2003）注意欠陥・多動性障害（ADHD）の多彩な精神症状について—児童精神医学と特別支援教育の視点から—。熊本大学教育学部紀要, 52, 81-84.
- 肥後祥治（2003）地域社会に根ざしたりハビリテーション（CBR）からの日本の教育への示唆。特殊教育学研究, 41(3), 345-355.
- 干川 隆（2003）子どもの発達の問題と対応。平山論・早坂方志（編著）発達の臨床から見た心の教育相談, ミネルヴァ書房, 183-200.
- 高原朗子（2004）高機能広汎性発達障害に対する心理劇—アスペルガー症候群への適用を中心に—。アスペハート, 4-9.
- 高原朗子（2004）発達障害児・者を理解するために。やまと支援・療育活動, 平成16年度紀要, 143-148.
- 干川 隆・加来さつき（2004）肢体不自由者の「自立活動」の支援—動作法による自立姿勢の変容—。熊本大学教育実践研究, 21, 53-59.
- 干川 隆（2004）特別支援教育を支えるためのツールとしての個別の指導計画—支援の個別化とネットワーク化—。11, 8-11.
- 干川 隆（2005）脳性まひ児・者の行為と知覚の相互作用。発達障害研究, 27(1), 4-12.
- 緒方 明（2005）軽度発達障害の家族支援について—障害受容が困難な例を通して—。家族療法研究, 22(3), 230-235.
- 河田将一・森 敦・一門恵子・緒方 明（2005）通常学級における学生ボランティアによる反抗挑戦性障害を伴ったAD/HD児への支援。LD研究, 14(2), 133-140.
- 高原朗子（2005）サイコドラマ対象の現在「自閉症児・者への適用」。現代のエスプリ, 459, 94-103.
- 肥後祥治（2005）教育支援のシステムづくりをめざして。教育と医学, 626(8), 13-22.
- 干川 隆・Stanley L. Deno（2005）校内委員会モデルとしてのアメリカ合衆国における問題解決モデル。LD研究, 14(2), 185-198.
- 干川 隆（2005）校内支援体制と支援の可能性。季刊特別支援教育, 16, 41-46.
- 干川 隆（2005）個別の指導計画の作成の意図と仕組み。柘植雅義（編）通常学級での特別支援教育P D C A, 教育開発研究所, 60-63.
- 干川 隆（2006）学習障害の児童への支援方法に関する展望—作動記憶の観点から—。熊本大学教育学部紀要, 55, 85-97.
- 干川 隆（2006）校内支援体制の確立。教職研修, 10月号, 34-37.

<口頭発表>

- 土井沙綾香・肥後祥治（2004）特別支援教育に関する講座の在り方について1：講座の満足度を通して。日本特殊教育学会第42回大会発表論文集, p 1-178.
- 松浦安希子・肥後祥治（2004）特別支援教育に関する講座の在り方について2：今後の講座内容に関

するニーズ調査. 日本特殊教育学会第42回大会発表論文集, p 1-179.

高原朗子・池田顕吾、楠 峰光 (2005) アスペルガー障害児への自我強化のための宿泊訓練 (その1). 日本自閉症スペクトラム学会第4回研究大会論文集, 34-36.

<出版物>

千川 隆 (編) (2005) 通常の学級にいる気になる子への支援. 明治図書.

進 一鷹 (2005) <ことば・文字・数>基礎学習の教材作成と学習法. 明治図書.

進 一鷹・間野明美 (2007) <ことば・文字・数>国語・算数の基礎学習と指導の実際. 明治図書.

**平成15年度～平成18年度科学研究費補助金
(基盤研究(B)(2)研究成果報告書)**

.....

**特別支援教育を担う教師の
トレーニングプログラム開発に関する研究**

.....

平成19年3月20日 発行

熊本大学教育学部障害児教育学科

進 一鷹

〒860-8555 熊本市黒髪2-40-1

E-mail: shin@gpo.kumamoto-u.ac.jp